北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第２号　平成14年１月
Bulletin of the Continuing Education Research Institute, Hokkaido Asai Gakuen University Vol. 2　January, 2002

路傍に見捨てられた植物　５題

― キクイモ・コンフリー・クレソン・セイヨウワサビ・アサ ―

Plants Abandoned by the Roadside：Five Examples－Jerusalem Artichoke Comfrey・Watercress・Horseradish・Hemp

前　山　和　彰
Kazuaki　MAEYAMA

Ⅰ　は　じ　め　に

日本では、山菜名をドングイとも呼ばれるイタドリ・オオイタドリは、どこの山野でも見られる植物である。だが、今、イギリスでは、日本から帰化したイタドリが国中にまん延し恐れられている。あちらの呼び名は「日本のタデ」。

イタドリは地下茎で広がり、その強じんな根や茎が、石垣や墓石を壊したり、住宅の床やスーパーの駐車場の舗装面を下から突き破って、がたがたにする。そんな大被害が広がっているという。また、堤防を壊し洪水を起こしたり、貴重な遺跡を壊す。語られている恐怖は深刻である。

そのイタドリは、19世紀にシーボルトがヨーロッパに伝えた植物で、飼料用や観賞用だったものが野性化し、周りに敵がいないので広がったという。今はイタドリとオオイタドリの雑種が怖いらしい。天敵の昆虫や菌類探しを日本でする計画もあるという。

では、日本でのイタドリ・オオイタドリはどうだろうか。古来からこの植物の地下茎の強じんさに気づいていたとみえ、自分たちの生活圏、すなわち庭園、住宅の近く、または墓地などには近づけていないのである。

平安中期の『清少納言』が、「見た目には格別のことはないのに、漢字で書くと大仰なものは」と、「枕草子」に記している。「イチゴ（覆盆子）」「ツユクサ（鴨頭草）」「クモ（蜘蛛）」などと、だが「まいて虎の杖と書きたるとか」と、清少納言が一番あきれているのが「虎杖」と書くイタドリのこと。なぜかと言うと、トラはそもそも杖なんかなくともいいほど、強そうな顔をしているからだという。

北海道のイタドリ（虎杖）は、自分たちの生活圏を知っているかのように、海岸、道路の土手、線路の土手、河川沿いなどに陣取っている。イタドリの多い胆振（いぶり）管内、白老町では「虎杖浜（こじょうはま）」「虎杖浜駅（こじょうはまえき）」などの名前のついているところもある。

イタドリの上記の記述は、日本からヨーロッパに渡った「帰化植物」の１例である。

では、帰化植物とはどのような植物をさしているのだろう。
帰化植物とは「よその国から渡ってきて、野生状態になった植物」をいう。外来の植物でもイネやチューリップは野生化することがないので、帰化植物とは呼ばない。

でも、この説明は、帰化植物の本質にかかわるものではない。もっと大切なことがある。それは、帰化植物が人間の力で運ばれた植物だということである。人間のほかに風や渡り鳥なども植物を遠方に運ぶ力はあるが、このような運ばれ方をしたものは帰化植物とは呼ばない。そのため、ほとんどの帰化植物は、人の居住地近くに居ついて、いわば人と共存する姿で生きている。

では、かつて外国から日本に渡ってきた数多くの帰化植物の中から、５種類（キクイモ・コンフリー・クレソン・セイヨウワサビ・アサ）を選び現在における状態を考察する。

Ⅱ　キ　ク　イ　モ

①　キクイモ　（キク科）[1)]

道ばた、畑の周りに野生する大形の多年草で、高さ１m～３mにもなる。秋には直径４cm～６cmぐらいの、ヒマワリに似た黄色の花を咲かせ、地下には大きなサトイモに似た塊茎がたくさんつく。

とくに、第二次世界大戦後の食糧難時代の自給作物として普及した。塊茎には、果糖やイヌリンが多く含まれ、アルコールや飴などの原料として使用された。ただ、デンプン質がないため、日本人の嗜好に合わず、現在ではほとんど栽培されていないが、見捨てられたものが日本の各地の河岸や土手、道端などで野性化しているものが多くある。

今、日本各地の路傍などに残されているわけは、戦争中アルコール原料として空地利用による栽培を強制されたためだと考えられる。高さが２m前後の多年草で上部でよく分枝し、９月～10月に多くの花を咲かせる。頭花は上向きで、直径７cmくらい。種子はほとんどできない。地上部が枯れるころにイモを掘り出す。そのイモは黄白色や紫赤色で秋から冬にかけて収穫する。

原産地は北アメリカの中・西部だが、17世紀にはヨーロッパに入り、フランスやイギリスで栽培された、数少ない北アメリカ原産の食料作物のひとつである。

日本へは幕末の文久年間（1863年ころ）イギリスからもたらされ、栽培された。これをはじめて日本にもって来たのは英国総領事（後の初代英国全権公使）オールコックであるという。

生麦事件（横浜市鶴見区生麦。島津久光の行列が生麦にさしかかった際、イギリス人４人が騎馬のまま行列の前を通過しようとしたのを怒り、従士が殺傷した事件）がおこったその頃、彼は宿所であった高輪東禅寺の境内にこれを栽培し、たくさんのイモを得た。喜んで自分で調理し、当時の老中、安藤対馬守に試食させ、日本人に有益な植物だからと栽培を勧めたという記録がのこっている。明治９年（1876年）の『農業雑誌』に津田仙という人の記事である。このころまでイギリスはむしろ幕府方であったことがこんな話にもうかがわれておもしろい。

日本人の手で始めて栽培されたのは北海道で、明治のはじめ開拓使の時代であったという。キクイモにはいろいろな品種があり、地中のイモは味がややクワイに似て、美味なものもあれば、まずいが収量が多く豚の飼料にされたものもある。

1945年（昭和20年）をはさんだ10数年間、家庭の食卓を賑わしたこの植物も振り返る人もなく、路傍に静かに小形のヒマワリに似た花を咲かせている。

Ⅲ　コンフリー(ヒレハリソウ)

②　コンフリー　(ヒレハリソウ)(ムラサキ科)[2)]

コンフリーの名でよく知られるヒレハリソウは、ヨーロッパ、小アジア、西シベリア原産の多年草で、日本へは明治の中ごろに薬草や野菜として移入された。

和名はヒレハリソウという。ヒレは、この植物の茎から枝に分かれる部分が魚の鰭（ひれ）の様になっており、また、花弁の状態を表すハリは、玻璃（はり）で『瑠璃も玻璃も照せば輝る』でお馴染みの「六面体の水晶玉」のことである。したがって、和名を分析すると「魚のようなヒレを持ち、水晶のような花を咲かせる草」ということになり、なんともすばらしい名前の草といえる。初夏には、淡赤紫色の花を釣り鐘状に咲かせる。

ロシアの長寿村で、この葉を食べているとの記事がイギリスで紹介された。それを知った日本でも「不老長寿の薬」･「栄養蔬菜（そさい）」として珍重され脚光をあびた。

庭園に薬用、観賞用として植えられ、生の葉をよく水洗いして、てんぷらにしたり、おひたしにして食べたという。

また、成長が速く、土質を選ばないので栽培が容易な点から、しばしば緑化植物や飼料用作物として、動物の飼料としても日本に導入された。

しかし、効果のほどは確かでなく、当時は、栄養価の高い食品として注目されていたが、一度に多量に食べると蓚酸の影響で胸が悪くなることがあるという。

さらに、当時のソ連や国内の研究でヒレハリソウ（コンフリー）に肝硬変やガンを起こすピロリチジン系アルカロイドが含まれていることがわかってきた。

ヨーロッパからシベリアにかけて広く野生する植物で、飼料にしたり、根茎や根をシムフイツ根と呼び、ヨーロッパではカタル、下痢、止血等の薬としている。

飼料または観賞用として栽培される多年草で、高さ１mに達し、初夏には淡赤紫色の花が咲き、道内でも家庭で栽培されていたが、道ばたや畑の周りに野生化してしまっている。

今では、生食としても、牧草としても嫌われ、道路脇に逃げ出さざるを得ない状況にある。農耕地に根を伸ばすこの植物と農家の方々との根くらべが続いている。

Ⅳ　クレソン（オランダガラシ）

③　クレソン　（オランダガラシ）（アブラナ科）[3)]

和名がオランダガラシ、フランス名のクレソンや、英名のウオータークレスともよばれ、生食野菜として有名である。ヨーロッパ原産の多年草。水田、小川など水辺に生える多年草で、地下または水中の茎に多くのひげ根があり、葉の長さ４～12cmで、白い花が５～７月に咲き、後に楕円形の実をつける。

北半球の温帯に６種が分布し、水の汚染がひどくなると消えてしまう。

オランダガラシの名前は知らない人も、クレソンといえばわかるほど、クレソンは一般的な名前で、八百屋でも売られていることがある。

オランダガラシは、明治の初め日本に野菜、または「刺身のつま」として導入されたが、その後、パセリの導入により使用頻度が低くなり、全国各地に野性化し、小川や水田の水辺に普通に見られるようになっている。オランダガラシの名は、食べると辛味があり、オランダから野菜として入ったところからつけられている。和名の「オランダ」は外来種であることを示すものである。

ヨーロッパ原産で、日本には明治の初め頃に入った。繁殖力が強く、茎の切れ端からでも容易に発根するため、世界各地で広く逸出帰化している。日本でも帰化した当初は都市周辺でちらほら見つかる程度でだったが、今では日本全土に広く野性化し川岸や中州、池沼、山間の清流に群生している。

（牧野富太郎博士のオランダガラシの記事…植物研究雑誌第３巻第３号、1926年より）『もと欧州産であるが、いまとっくに日本中に拡がり、野草の状態となり、遠き山間の地まで入って繁茂している。洋人はこれをウォータークレスと呼ぶ。茎葉の柔らかさにくらべまことに強い草で、しばしば広き水面をおおうことがある。清水の流れるところに茎のひと切れを入れれば、たちまち根をおろし、葉を生じて繁殖する。欧州で春の「サラダ」として用いるのは太古からのことで、一般に西洋の人々はこれを食えば食欲をまし、血液を清潔にする力があると信じている、これを日本流に食うにはその若き茎葉をゆでてゴマあえとし、また味噌汁の実などにする。』

（田中芳男氏のオランダガラシの記事…植物研究雑誌第３巻第３号、1926年より）
『維新２、３年前に種子渡来、明治４年ごろに東京鍛冶橋内にある陸軍省御雇外国人の家の溝に繁殖、人みなこれを奇草とよぶ。明治９年上野公園内に精養軒の建った後、その構外の溝にこの草を生じ…。」以上はどちらも、「野草図鑑」の著者、長田氏が現代風に書きなおしたものである。

オランダガラシは、家庭庭園の池などに入るとじゃま物扱いされることもあるが、多くのこ

の植物は、川辺や山間部の清流に繁殖し、家庭の食卓に上ることもある。

V　セイヨウワサビ

④　セイヨウワサビ　（アブラナ科）[4]

道内の土手、畑の周りに野生または栽培されている多年草で、全体に毛がなく、茎は真っ直ぐ60～130cmになる。根は太く地面をはうように生える（根生葉）は、束になって生えていて、この葉は長楕円形で、長さ20～50cmになり、縁には丸みのあるギザギザがたくさんある。初夏に花弁４枚の白い花が咲き、ガク４枚、雄シベ６本、雌シベ１本である。

もともとは、南部ロシア、ウクライナ地方原産の植物で、ヨーロッパ、アメリカで香辛料として栽培されてきた植物で、日本にもワサビの代用として、東北、北海道に導入されたのが、現在、野性化して道内の各地で見られる。根は太く、ダイコンに似ているので、一般に、ウマダイコンとかワサビダイコンと呼ばれてる。

セイヨウワサビの根には別属のワサビのような辛みがある。ワサビは日本の固有種だが、セイヨウワサビはロシアのカスピ海北部沿岸のアストラハニ付近が原産といわれ、現在では広くヨーロッパに分布する。

16世紀末にイギリスで薬用とされた記録がある。今では欧州で広く栽培され、サラダや肉・魚料理の調味料として、またソースの原料に利用されている。

日本には明治初年の1873年にアメリカから導入され、長野県や北海道の各地で栽培されたが、今では野性化しているものが数多く道端や、畑の縁にも見られる。

栽培は平均気温20°C前後の地域がいいとされる。根の肥大は９～10月ごろに旺盛となり、このころに辛み成分であるシグリニンも増加する。日本では従来は緑色の顔料を加えて粉ワサビにしたり、粕漬けの原料として利用されたが、最近ではローストビーフなどの西洋料理にも重宝されている。

ただ、現在広く普及している「練りワサビ」の主原料はセイヨウワサビである。

1960年（昭和35年）頃まで、北海道の農家で栽培されていたが、栽培を他の畑に移しこのセイヨウワサビの後に違う作物を作付けしても、根が深く入り込んでいるため根絶できずに、何年間もこの植物の根のため苦労した農家が大半である。現在でも畑のあちこちにセイヨウワサビが堂々と生えているところがある。根絶やしに苦労している農家の畑に違いない。

今では、堤防、水辺、畑のふちに生えるセイヨウワサビ、この味を知っている食通は、採取し食卓に上らせている。

Ⅵ　ア　サ

⑤　アサ　（クワ科）[5]

日本では、第二次世界大戦中、日本の陸海空軍が使用するロープなどの原料として、亜麻とともに強制的に栽培を強いられた植物で、現在、全道にある36の保健所が駆除にあたっているが、すべてを取り除くことができず困惑している状態である。

1961年（昭和36年）に制定された農業基本法は、農家の離農に拍車をかけたようになり、特に北海道では山間部の農家の離農が続くようになっていった。その離農者の跡地に毎年のように処理をしていた農家の方々が不在となり、数本でも残っていた大麻がおびただしい繁殖力で増え続けている。各保健所で通報を受け現場に赴き、一株ずつ抜き取り焼却処分をしている状況であるが、現在では、報道機関にも内密にしているようである。もし報道しても現場がどこであるかは報道しないことになっている。

大麻そのものを他の植物と区別できるのは農家の方々であるが、保健所または警察に通報を渋る傾向にある。それは、大麻を採取しそれを届けた場合は、不法所持者として現行犯逮捕される危険性があり、また、現場を通報し警官・保健所の所員をその現場まで案内し、採取、焼却処分を手伝うと１日か２日の自分の農作業が遅れてしまうからである。

花の咲いている時期（７～９月）に処分を終えなければ、種子をつけそれらが散布してしまうので遅過ぎる。

アサ科は２属３種からなる小さなグループだが、古代から人間とのかかわりが深い。科を代表するアサは、日本では許可なく植えることはもちろん、所持することも禁止されている。

栽培種の花序（花の集まり）からとったものをガンジャ、野生の花序や葉からとったものをマリファナ、雌株の花序と上部の葉から分泌される樹脂を粉にしたものをハシーシュといい、総称して「大麻」という。

花序（花の集まり）や葉を乾燥させたもの、また幻覚成分を含む樹脂が「大麻」とよばれ、吸引は日本だけでなく世界中で禁止されている。

アサは雌雄異種だが、その雌花や花序や上部の葉から分泌される樹脂様物質の中にテトラヒドロカンナビノールととよばれる化学物質が入っている。花序や葉を乾燥させて粉にし、タバコなどと一緒に吸うと多幸間が味わえるが、大量に服用すると幻覚や妄想が現れる。
そこで、乱用防止のために「大麻取締法」で、栽培、所持、譲受、譲渡などを規制している。

麻で酔うようになることから「麻酔」の用語が生まれ、麻酔剤として利用されてきた。
果実は食用となり、日本では七味唐辛子の一成分とされ、小鳥の餌にもされる。薬用としても重要で、老人など虚弱者の便秘に用いる。また、30％～35％含有される種子油は、石鹸やワニスの原料になる。

アサは、繊維植物として紀元前20世紀には中東で栽培され、利用されてきた。繊維は花期の茎から収穫したものが良質で、収穫期が早いと短く、遅いともろい。衣類やキャンバス地、ロープの材料として利用される。帆船の登場によって需要がふえた時期もあった。

近年、化学繊維やその他の植物繊維に押されて需要が減ったが、独特の肌ざわりと通気性の良さとで、高級品として復活している。ただ、日本では栽培禁止の植物である。

外国から持ち込まれるものと、日本で採取されたものとによって大麻の事件が絶え間なく続き報道機関を賑わしている。

日本全国の道端、空き地、畑のふち、山間部に繁殖しているこの植物を根絶するには、時間のかかる問題であり、関係機関に任せるだけでなく、住民も「大麻」を知り通報する姿勢が必要である。

Ⅶ　おわりに

2001年８月30日、北海道新聞に「セイタカアワダチソウから雨竜沼湿原守ろう」と題し、雨竜沼湿原の貴重な植生を守るため、同湿原への登山口周辺と登山道で９月２日に「セイタカアワダチソウ駆除作戦」を行うという記述があった。

このセイタカアワダチソウは、戦後と言われる1945年（昭和20年）８月以降、日本各地に見られるようになった植物で、北海道ではアメリカ軍の空軍基地であった千歳空港周辺から広がったとされている。それから10数年にわたり、花粉病原因説、養蜂家増殖説、徹底根絶論など、これほど一般の話題にのぼった植物は少ないであろう。まさに、ヨーロッパに帰化したイタドリのように一時は騒然とした時代もあったのである。

泡立ったような黄色い花をつけるセイタカアワダチソウは、周りの植物を枯らしながら繁殖する帰化植物であり、雨竜沼湿原では花の咲いている時期だけ、誰にも他の植物との判別ができるようにボランティアを募集している。放置しておくと種子が湿原内に入り植生に影響を与えるため、数年前から実施している駆除作戦である。

帰化植物の侵入は更に続いている。日本における高速道路の路肩の斜面（法の部分）を見ると驚く。これらに使用されている芝生の種子は、すべて外来種のイネ科植物である。

イネ科植物は、葉が出てきた段階では日本在来種との区別はなかなか難しいが、成長とともにやがて花穂（かすい）が現れる。すると判別がしやすい。日本の高速道路になぜ在来種の種子を使用せず、外来種を選ぶのか判断に苦しむところである。

ここ７、８年、海外から国内への帰化植物の侵入がすざまじく、日本固有の植物に脅威を与えている。農産物の輸入自由化で、穀物などが世界各地から大量に入ってくるようになった。特にアメリカでは、環境にやさしい農業を目指して農薬を使わなくなった、などが外来植物の種子が急増した理由だという。輸入穀物は薫蒸処理しているが、害虫駆除が目的なので、雑草種子を殺す効果がない。植物検疫も麦や稲ワラの混入を防ぐだけである。このため雑草種子に

とって日本は丸裸の状態に等しく、侵入を防ぐ決め手がないという。

また、園芸植物として植えられたものが逃げ出して雑草、害草となる例は多く、特に珍しい植物を見さかいもなく集める植物園は、帰化植物の一大供給源となっていることが多い。植物の病虫害には植物防疫法があるが、雑草、害草の無制限な導入栽培にもある程度のブレーキが必要であろう。

Ⅷ 注

1）山田恒史（1983）：植物の世界　第１巻：朝日新聞社　p148
2）山田恒史（1983）：植物の世界　第２巻：朝日新聞社　p275
3）長田武正（1983）：野草図鑑　第６巻　保育社　p32
4）山田恒史（1983）：植物の世界　第６巻：朝日新聞社　p165
5）山田恒史（1983）：植物の世界　第８巻：朝日新聞社　p157

Ⅸ 参 考 文 献

1　山岸　喬（1992）：北海道薬草図鑑.　北海道新聞社
2　中村睦男（1993）：北海道の花.　北海道大学図書刊行会
3　狩野　誠（1989）：薬になる野菜と野草.　福音社